

気発生に関連のある実験結果を発表した。これは前から Reynolds らがやって来たものの発展である。それは純粋の水で作った2つの氷片を接触させると、温度の高い方が負に帯電し、 10^{-4} N の NaCl の氷と純粋の水の氷とを同じ温度で接触させると、NaCl の氷の方が負に帯電する。そのほかの実験結果も並べて起電力についての仮説を出した。

田村教授は1957年の夏に京都付近で行われた雷雲電気 の8点観測について発表されたし、筆者は1940—1944年 に前橋付近で行った雷雨観測の中、現在持出しでもなお価値があると思う部分を報告した。和達、広野両博士の電光、雷鳴の時間の機械観測なども引合いに出しておいたのだが、これについてはあとから細かい点の質問があった。

雷放電のセッションでは北川信一郎氏が“電光放電による電場変化と光度変化”を、金原教授が“極東における空電の概説”と“電光の機構と空電の放射”を報告された。

会合の最初の計画では3時間のセッションの1時間10分すぎから10分間の休憩があり、2時間終わった所から討論に入り、3時間の所で終りになった。すなわち一々の講演のあとですぐその論文に対する質問と討論を行わずあとでまとめてやろうという考えであった。最初はこのやり方で行われたが、後のセッションでは一々の論文毎に質問を行っていた。

20日の14時に開会の時には GRD の全体の Director, Milton Greenberg の歓迎の辞があり、23日の最後には GRD の Aerophysics Laboratory の Chief, P. H. Wyckoff の閉会の挨拶があった。

会議に付いた行事

20日の夕方は16時半から皆で海岸に出て Clambake と称する夕食会があった。海岸に大西洋のロブスター（日本のイセエビに比べて第1肢がうんと大きく、大きい鉄

がついている）とクラムという貝（日本のハマグリと鳥貝の中間のようなもの）をゆでるかふかすかする釜がしつらえられてあり、その脇の簡単なベンチとテーブルでこの2つのものを主にして食べるのである。これを食べるために大きなエプロンと揃いの紙帽子を渡され、仮装する所が面白い。この日寒冷前線が通り、この夕方は 50° F で戸外でこういう催しをするには寒すぎた。緯度が高いことと、夏時刻のために暗くなるのは20時半位だから16時半からでもこういう催しがゆっくりできる。

21日の午後はポーツマスの近くにある Pease 空軍基地へ、気象電気観測用飛行機をバスで見にゆくエクスカーションがあり、その帰途ポーツマスの歴史的建造物の2、3を見物した。ここでは一番古い建物でも1664年のもので300年位の古さでしかないから、外国から来た人達は皆笑っていた。

このため21日は晩19時から22時までのセッションが行われ、22時に終わってから Social hour というのがあった。これはカクテル、ビール、コーヒー、紅茶、何でも好きなものを飲んだり、軽い食物を食べたりしながら話をする会なのだが、多くはここでもさっきまでの講演に対する討論を続けていた。

22日の夕食は演説つきの夕食会ということになっていて、主催者 GRD の主な人達や、右セッションの座長が食堂の側の高い席につき、食後カリフォルニア大学のホルツァの気象電気の過去、現在、未来を展望する大講演があった。

第1回の時の論文集はオフセット印刷で GRD から Geophysical Research Papers, No. 42 として出ているが、今回の会議の論文集は JATP などを出している Pergamon Press から出版する計画で、会議の直前に校正刷の届いた人もあるし、会議の時に校正刷を渡された人もある。この秋9月か10月には出版になる予定と言う。

例会告示 (II)

レーダー気象シンポジウム

日時 10月8日
場所 気象庁 第一会議室

第7回航空気象シンポジウム

日本航空学会 } 共催
日本気象学会 }

日時 10月15日(水)午後1時

場所 気象庁研修所東京教室
講演申込先 大田区東京国際空港内

東京航空地方気象台 上松 清

申込締切 9月30日

第5回風に関するシンポジウム

予告ならびに講演募集

参加学会 土木学会、地理学会、海洋学会、火災学会、建築学会、航空学会

日時 11月11日(火)、12日(水)

場所 新宿区百人町 建設省建築研究所